

今日は、降臨節前主日。教会の暦の1年で最後の日曜日です。そして次の日曜日から、教会は新しい暦に入ります。それで、このところ、世の終わりを意識したマタイによる福音書25章のお話選ばれています。2週間前は、花婿の到着を待つ「10人のおとめの話」でした。また、先週は、主人が旅から帰って来るのを待つ、僕たちの「タラントンの話」。そして、今日は、羊と山羊を分ける「すべての民族を裁く」という話でした。

特に今日の箇所は、インドで働いていたマザー・テレサがよく引用していて、私たちに隣人愛ということの大切さを教えている、ということで、有名です。そして、ロシアの作家、トルストイが作った「靴屋のマルチン」とか、「二老人」などでも引用されていたように思います。

ところで、この話の前提となること。「羊飼いが羊と山羊を分ける。」ということが書かれていますが、どうして、羊と山羊は分けなければならないのでしょうか。私はこのことを考えたことがなかったのですが、先日、ある人から質問されて、調べてみることにしました。

イスラエルあたりでは、羊と山羊は、昼間は一緒に放牧されていました。ところが、夜になると、山羊は寒さを嫌うので別に分けて洞穴や小屋に入れ、羊は新鮮な空気を必要とするので戸外の囲いに入れた。そんな習慣から、このお話ができた、ということが書かれていました。

しかし、羊と山羊の習性の違いで説明するものもありました。羊と山羊を一緒に置いておき、そこに餌を与えると、山羊は羊を押しつけて、ガツガツそれを食べるので、弱い羊の中でも、子どものヒツジなどは、十分に栄養を取れないため、分けなければならないんだ、というものもありました。

この習性などを考えると、どうも山羊の方がわがままな動物のように思えてしまいます。

さて、本題に入らなければなりません。

お話は単純です。隣人という言葉で簡単に片づけてはいけないかもしれませんが、「この最も小さい者」に、親切にした者は、天の国を受け継ぎ、この最も小さい者に親切にせず、無視していた者は、地獄の永遠の火に投げ入れられる、ということです。

しかし、ここで注意しなければならないことは、右側と左側にそれぞれ分けられた人たちに王様が言った、最後の言葉です。

『25:40 そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

『25:45 そこで、王は答える。『はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』

この言葉を根拠に、目の前の困っている、最も小さい者は、王様、つまり神様のことだ、と受け止めて、神様に褒められたくて目の前の人に親切にする、というのは、これは正しい生き方でしょうか？

神様の目があるから、あまり好きじゃない人にも親切にして、天の国に入ろう。天の国に入りたいから親切にしよう。あるいは、地獄の火で焼かれたくないために、人に親切にする、ということになります。子どもに悪いことをさせないために、「人は見ていなくても、神様はいつも見ておられるんだから。」と教えるのは、成長段階では必要かもしれませんが、そんな基準で生きているのは、「動機が不純」ということにならないでしょうか。

注目していただきたいのは、右側の人も、左側の人も、王様の目、神様が観ておられる、ということを意識していないということです。

特に左側の人の言葉。

『25:44 すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』

この発言を推し進めたなら『主よ、もし目の前の人があなただったら、私はあなたの空腹を満たし、のどの渇きをいやすために水を差し上げ、宿を貸したり着物を着せたり、お見舞いに行ったですのに。』と言いつつ訳を失っているように思います。

こちらは困っている人を助ける気もないので問題外ですが、右側の人は、神様のことなど意識しないで、ただ目の前の人を助けているのです。これは理想的過ぎるのかもしれませんが、大切なことを私たちに教えているように思えます。

どうも、私たちは、目の前で困っている人を助ける、という単純なことをするのではなく、神様でもいいし、王様でもいい、第三者の評価ということを意識して行動してしまう。結局、自分が行動することが自分にとって損か得か、天国に入るために有利か不利か、ということを経済計算して行動しているのではないか、ということです。

以前何度か紹介した本ですが、私は、「つい話したくなる 世界のなぞなぞ」という本の中に、こんななぞなぞがあります。『いくら見ても信用できないもの、な〜んだ?』。その答えは『鏡』と書かれていて、その説明に「私はもっと美しいはず!」という言葉が添えられていました。

それに関連して、こんなことが書かれていました。

『ところで、日本で実施された某アンケートによると「女性で1日に1回も鏡を見ない人」の割合は、わずか0.2%でした。つまり500人に1人。残り499人の女性は、「1日1回」は鏡を見ていることになります。まさに必需品、というか、なくてはならないものです。

一方、男性では「1日1回も鏡を見ない人」は3%います。約33人に1人。これを多いと見るか、少ないと見るかは見解が分かれるところですが、学校のクラスとか職場の部署に1人はいそうです。

この500人に1人の「鏡を全く見ない女性」は、どんな方なんだろうと調べた所、意外な人々でした。たとえば「修道女」、いわゆるシスターです。別に修道院で鏡を見ることが禁止されているわけではありませんが、修道院によっては、鏡が存在しないことがあります。あのマザー・テレサも、修道院に1枚だけあった鏡の前で、修道女たちが身支度しているのを見て「修道女は外見を磨くのではなく、内面を磨くもの」と、鏡を黒く塗りつぶしたという逸話が残っています。』

これは、私たち人間が、他人の目、外見を気にして行動している、とも言えるように思います。

さあどうでしょうか。

私たちは、神様の目とか、他人の目を意識して、目の前の人と対峙できなくなっているようなことはないでしょうか。最近では、スマホばかり見て、相手とともに顔を合わせて話さない人もいるらしいですが。

神様のことも、他人もスマホも忘れて、目の前の人に正面から向かい合い、自分にできることを一生懸命すること。それが本当の信仰者のあり方だと、今日の福音書は教えているように思います。